

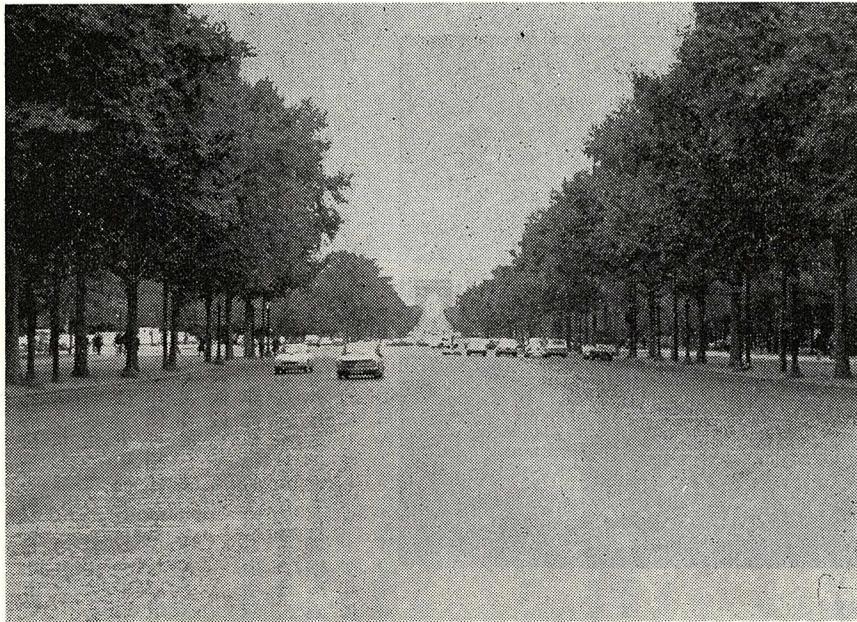
# 報 廣 あかいけ

発行所 赤池町役場 編集 総務課 文書広報係 No.153号

## 町の人口

(50年1月末日現在)

男	4,328人
女	4,809人
総人口	9,137人
世帯数	2,790世帯



(凱旋門通り パリーにて)

## 渡欧を終えて(四)

赤池町長 池 永輝 昭

朝の八時にテルミーニ駅を出た  
TEE(特急列車)R68はイタ  
リア本土を北上してフィレンツェ  
経由で予定どおり十二時過ぎポ  
ーニア駅に到着、ポローニア大学  
の竹下教授が、我々をホームまで  
出迎えてくれる。駅近くのレスト  
ランで昼食しながら、午後の見学  
日程を打ち合わせすれども、どこ  
の工場も二時までは昼休みとのこ

と故、その間イタリアの政治経済  
教育等の現状について詳しく聞か  
せてもらった。

イタリア滞年在八年にもなる教授  
の話は、職業柄非常に巧みで、短  
期間の視察を通じて感想文を書いた  
報告書等と違い誰よりも確かな見  
方をしていると思える。

人口五十万のこの市は、第二次  
大戦中イタリア解放のため、ナチス  
と闘って最後まで抵抗を続け、決  
してドイツファシストに降伏しな  
かったことで有名である。

レジスタンスに倒れた二十二人の  
人達の写真は、市庁舎の壁にはめ  
こまれているとのこと。

イタリアの赤い州といわれるエ  
ミリア、ロマーニヤ、ウムブリア  
トスカナ三州の中でもポローニア  
は、フィレンツェと並んでその中  
心的役割を果たし、歴代共産党員  
の市長で、市政に責任をもってい  
るのは共産党、社会党、プロレタ  
リア統一社会党で革新連合地方版  
といったところで、イタリアのな  
かでも特に左派勢力の強いところ  
である。

行政負担による福祉行政はかな  
り進んでいるが、市民の生活はそ  
れ程豊かではなく、企業経営者と  
労働者の所得格差は著しく、スト  
ライキによる操業停止は、たびた  
びで、日本から視察にきた京都大  
学のある教授は、これ等の工場が  
フル操業すれば日本のGNP(国民  
総生産)をはるかに追いつくす  
であろうと驚ろいたそう。

教授の大学も本来ならば十月一  
日より新学期が始まるころだが、

賃上げストのため十四日まで休校  
で十五日からは、今度は学生が一  
ヶ月間のストライキのため学校に  
行くのは、十一月十五日からで当  
分はひまだと、のんきなことをい  
って我々を笑わせる。

たびたびのストで教授の給料は  
高いが政府財政が、破産状態のた  
め既に九ヶ月間給料は遅配でいつ  
もらえるかの見通しもなく生活も  
ギリギリに切り詰めているとのこ  
と。財政を上まわる行政需要は、  
市の台所も当然赤字でその累積は  
膨大なもので、このツケは一体誰  
が何時払うのかと、まゆをひそめ  
る。話なかばで店を出てタクシー  
をひろい、目的のタイル工場へ向  
け出発する。

車は「太陽の道路」といわれる  
高速道路をもつすごいスピードで  
走り、はてしなく続くオリブの  
木とブドウ園を左右に見ながら百  
軒離れたフェンツアの町に一時  
間程で着く。

とある一軒の陶器店を訪れ工場  
見学の許しを乞うと心よく承諾し  
案内をしてくれる。十人程の若い  
娘が馴れた手付きで下書きする  
作業は特に我々の目を楽しませる  
ことでもやはり我々の質問には懇  
切丁寧に教えてくれた。

市民のための陶芸教室や博物館  
等は折角の機会だから是非立寄よ  
うにすすめられる。

二時間程で店を出て教えられた  
陶芸教室を訪れるも本日は午前中  
で終了とのこと、生徒の作業場  
は見ることができなかったが管理

人の好意で作品の展示場だけ案内してもらえない。  
素人の作品とは思えない程の出来映えで、こんな素晴らしい作品の製作方法を希望者は誰でも自由に教えてもらえるこの町の人々が羨しく思え、さすがにこの国の一の陶器の町として今日まで栄えてきた理由の一端が伺える。  
今でも国際的な展示会や博覧会などがローマやミラノの大都市ではなく、この小さな田舎町で開かれることをみてもこの町の人々が陶器に寄せる関心が如何に高いかがわかる。

次号へつづく

### 学年末の少年の非行防止について

最近の少年非行は、遊び型化の傾向が強くなってきています。  
特に、学年末は卒業、進学、就職をひかえ気のゆるみ、あるいは心の動揺などから少年が非行に走りやすい時期です。したがってこの時期の少年非行を防止するためには、父兄は勿論、住民の皆さんの御協力をお願いします。  
(学校)  
日頃から生徒、児童の行動に関

心を示すとともに、非行に走り、あるいは非行に走るおそれがある場合は家庭、少年補導センター、警察などと連絡をとり、早期補導による未然防止を図る。  
(家庭)  
明るいふん囲気な家庭づくりが心がけ、子供の悩みや不満など気軽に話し合えるようにしましょう。子供は正しくしつけ、放任と過保護はつしむようにして下さい。子供が進学や就職に失敗して

も暖かい思いやりのある態度で接し劣等感や折感をとり除いてやるようにしましょう。又、子供が非行に走ったり、被害にあったときは、少年補導センターや警察署少年係に相談して正しい道へ導びくようにしましょう。  
(地域)  
非行を犯している少年や家出少年などを見かけたときは、愛の声をかけるとともに警察へ連絡するようにしましょう。少年に悪い影



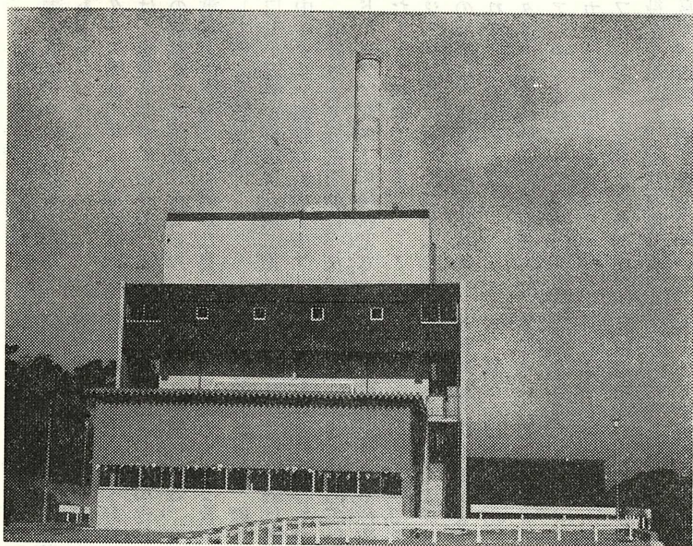
(町かどで少年を補導し 悪の手より守る少年補導員さんたち)

響を与えるエログロ映画、ポスター、雑誌や危険な遊び場、がん具などを追放して、明るい町づくりに心がけるようにしましょう。  
毎月第三水曜日は「少年を守る日」となっています。少年を悪の手から守って下さい。  
町民念願のじんかい処理場が三月四日落成されました。このじんかい処理場は、赤池町、金田町、方城町、糸田町の下田川四ヶ町からなり建設された清掃センターは

### 下田川じんかい清掃センター落成する!

公害防止に意を投じ、マルチサイクロンに電気集塵機を併設された近代的な処理施設のもので、煙突も海拔百三メートルの高地に建設して煙の拡散をはかり大気汚染を防ぎ、また汚水は構外に排出しないように設計され、機械部分は全部上屋でおおい、臭い、騒音などの防止にため、すぐれた施設です。又、昭和五十年年度には、老人福祉センターを建設する予定です。

今後、住民の皆さんの御理解と御協力をお願いして清掃センターの発展と住みよい環境整備のもとで、明るい町づくりに御協力をお願いいたします。



(近代的スマートな下田川清掃センター全景)

### 福岡県青年の船に参加して

赤池町車道 松下英典

第四回福岡県「青年の船」は二月一日から二月十四日まで二週間フィリピン共和国(セブ・マニラ)を訪問し、研修活動、親善使節としての役目を持って航路についた。

出発に先立ち、赤池町民会館で壮行会まで開かれ、町長さん始め議長さん、教育長さん、公民館長さん方の暖かい御激励及び、色々な御配慮を載せて、心から深く感謝しながら参加する者としての重

責をひしひしと感じた。

二月一日十一時、いよいよ出発低くたれこめた雲の中に県内各地から多勢の方々の見送りをを受け、団員三百二十名余りを乗せた「にっぽん丸」(一万トン)は博多港を静かに出航した。  
二日目は朝からや、しげ気味の航海で、酔いをする者が続出。三日目は前日とは異なり晴天、気温も一時間ごとに高くなり、昨日までは暖房だった船内が今日からは冷房が入るようになった。本日は博多とセブ市との中心点を通過する。  
四日目の午後から第二次世界大戦で当地方の空や海で尊い命を失った方々の戦没慰霊祭を船上で行う。団員の中にも関係遺族の方が多数おられた。

五日目朝、二時頃南太平洋上の澄んだ空にひとときわ明い光を放つ南十字星を見た。  
いよいよ午後二時セブ港に入港一時間前ごろから歓迎の小船が何隻もエンジンの音けたたましく「にっぽん丸」の周りをとびまわる。簡単な上陸オリエンテーションの後、タラップをおり、初めて外国の土をふんだ。

美しいフィリピン女性に貝で作ったレイをかけてもらい、緊張と感激と未知の国への期待で、こわばった顔にむりに笑顔を作りながら感謝の挨拶をして、歓迎式場へ行く。夜は、セブ市の名士を招

いての船上パーティを行った。  
六日目、サンカルロス大学でスポーツ交歓を行う。フィリピンはバスケットが国技であるせいか学生達も皆バスケットが好きであったが日本の柔道競技も大変喜ばれた。  
体育館で日本とサンカルロス大学のチームが対決している間、我々は学生とスポーツや青年の生活などについて、ゲームそっちのけで話し合った。フィリピンの人々は大変陽気で人なっこく、おまけに女子学生は皆美人揃いで、我々男性はすごく感激した。

午後の自由時間は大学で知り合った女子学生が市内を案内し買い物につき合ってくれた。  
夜、セブ港をマニラ港に向け出港翌々日マニラ港へ入港。簡単なオリエンテーションの後すぐ上陸、そのまま、バスで市内見学。

途中東洋で一番古く、アメリカのハーバード大学より二十年以上も古いと言われている伝統あるサント・マス大学へ。ここで一時間以上の交歓会。マニラの人々は日本人ずれして大変冷淡と話には聞いていたが、それでも学生は親切に大学構内を案内して説明してくれた。  
どうも「日本人の歓迎」と「フィリピン人のやゝ無関心」は同程度の態度で表われているらしい。

セブ市、マニラ市とフィリピン

ンに上陸し強く印象づけられたことは生活に貧富の差がかなり激しいことである。

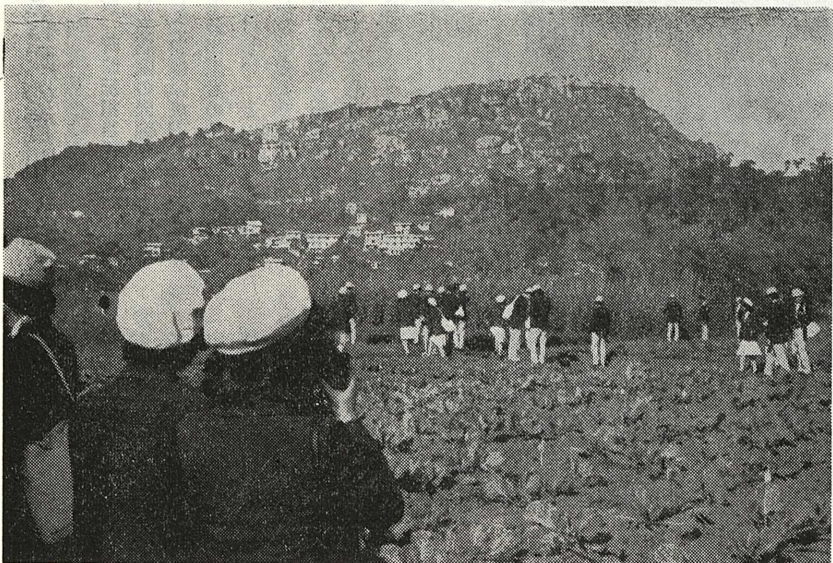
欧米製の高級車を乗りまわして豪華な家に住んでいる人がいるかと思えば、傾いた小屋から素足で破れ汚れたシャツを着た子供や老婆が出て路上で煙草のバラ売りをしている姿を見掛ける。

しかし下層階級と言われる人も上流階級の人でも大変陽気で明るくのがびして生活の差別など気にもかけていない様に見受けられるのは国民性の違いであろうか、又非常に正直である。

セブ市で買物をしておつりも来ずに行きかけると追いかけて品物を店に忘れていたといつてわざわざバスまで持ってきてくれた。

これが若し日本の観光地だったらと考えざるを得なかった。この様な十四日間の「青年の船」の生活は自分の人生に数多くの教訓と反省を与えてくれた。そして良い体験の場であったと思う。

このようなフィリピンで学び得た貴重な経験を生かして、若い仲間とともに明るい豊かな社会の実現のために地域社会に於いて少しでも貢献できるように努力して行きたいと思う。



福岡県青年の船に参加して